詠む広場

毎日俳壇

西村　和子　選

独りぼち石鹸玉千みな消えて
東　京　望月　清彦

△評▽シャボン玉を吹き続けていた時は華やかだった周辺の、その後の孤影を描いたのは、俳句ならではの手法と言えよう。

剪定の脚立に一人地に一人
大　阪　池田　壽夫

△評▽脚立の上で作業しているのは弟子。地上から時折声をかけているのは師匠だろうか。

消しゴムで昨日を消して卒業す
北名古屋市　月城　龍二

嵐待つ思ひそかに花盛り
川越市　峰尾　雅彦

仮縫ひの声洩れ来るや春障子
東　京　山口　治子

茹でたてを手伝ふ子らや白子干
行田市　荻原　義久

言ひ訳の口に黄な粉や鶯餅
東　京　種谷　良二

外堀を埋めつくさんと桜散る
倉敷市　中路　修平

鴉の巣病院一の欅の木
小田原市　林　梢

つばくろの声に目覚むるきのふけふ
千葉市　高橋　信子

井上　康明　選

土くれのひとつとなりぬ落雲雀
八街市　山本　淑夫

△評▽地上におりたヒバリが土にまみれて遊ぶ姿を思い浮かべた。土くれのひとつという表現に、その地に生きる風土感がある。

生き死にの境に一本桜さく
直方市　岩野　伸子

△評▽生死の境にいる人がいて、その思いを胸に、咲き満ちる桜を見上げているのだろう。

風光る水上バスのさくら号
浦安市　上村実川喜

間延びする下校の列や日脚伸ぶ
出雲市　石川　寿樹

唐崎の松を騒がせ春一番
城陽市　藤宮　幸房

雲母忌と言ふべき春を惜しみけり
富士市　後藤　秋邑

春愁やマックポテトのL二つ
白石市　椿　佳香

西空に浮き雲一つ久女の忌
唐津市　梶山　守

風光るポニーテールの医者若き
伊勢市　藤井　信弘

岩刻む梵字に春の光満つ
大　阪　道畑日出子

片山由美子　選

ボート部に新人五名水温む
志木市　谷村　康志

△評▽昨今、ボート部の人気はどうなのだろう。新人5人は久々のことで歓迎されているのかもしれない。競技シーズンも近い。

しばし手を休め聞き入る春の雨
池田市　髙倉　明子

△評▽耳を傾けたくなる趣のある音というのが春の雨ならでは。聞き入るしぐさが目に浮かぶ。

耕せば地球ゆつくり目を覚ます
津山市　岡田　邦男

もう人の戻らぬ家や紅椿
和歌山　神野　一馬

事務室に水栽培のヒヤシンス
直方市　岩野　伸子

春ごたつ仕舞ひきのふの遠のきぬ
加古川市　伏見　昌子

春泥や赤き長靴欲しくなり
大阪市　岡田マチ子

三月の雨入院の荷を届け
小田原市　林　梢

揚ひばり地球が青く見ゆるまで
和歌山市　大倉　義正

春灯間口の狭き店並び
香芝市　山本　合一

小川　軽舟　選

花冷の屋台湯切りのてぼ高く
下野市　石井　光

△評▽てぼは、ゆでた麺の湯切りをする取っ手のついたざる。「高く」で湯切りの勢いの感じられるスケッチになった。

犀星忌犀川沿いに宿を取る
守谷市　久保田洋二

△評▽室生犀星ゆかりの犀川。その地に泊まる気分のたかぶりが句の調べに表れている。

鶯の声遠くして朝の雨
神戸市　中林　照明

水温む車を洗ふ日曜日
愛西市　小川　弘

地層なすプラスチックや鳥帰る
四條畷市　中尾　謙三

春光やバイパス沿いのラーメン屋
多賀城市　矢崎　英敏

後ろ手のふたりバス待つ蕗の薹
館林市　坂口いちお

朝刊を広げしままに春炬燵
香取市　多田ひろみ

蜷の道はづればかりの阿弥陀籤
愛　知　髙橋　一枝

鳩群れて春田飛び立つ羽音かな
佐倉市　伊藤　榮子

アプリで推し短歌

アプリ「57577」の投稿からユーザー人気をふまえて歌人の天野慶さんが選歌と評を担当します。アプリは右のQRコードまたはhttps://tanka.one/からダウンロードできます。

短歌アプリ 57577

お題「花」

・赤ちゃんがぽこんとお腹を蹴るときに地球の裏でゆれるたんぽぽ　鹿ケ谷街庵

「ぽこん」という優しい音と「たんぽぽ」の名が響きあいます。小さくても力強い足の力と、地球の裏のたんぽぽの揺れがリンクする。春のぽかぽかした陽気のなかでは、こんなつながりが生まれても不思議ではないような……。アプリでの人気が断トツだった穏やかな一首です。

・主人公なんかじゃなくてフィナーレで花を降らせる人でありたい　ｕｍｅ

みんなの視線は、花が降り注ぐ先の主人公に集まっています。でも枠の外にもたくさんの、誰かを輝かせるために一生懸命になっている人がいると、作者は気づいています。光から外れた場所で、祈るように花を降らせる人の美しさを知っているから「ありたい」と願うのです。

・選ばれぬ花だとしてもほほ笑んで　私は私のために生まれた　待花つみき

フラワーショップは、いつでも季節の美しい花であふれています。その中から「あなたがいい」と選んでもらうのは、奇跡みたいなものなのだ、と改めてハッとさせられます。何も恐れないまっすぐな下の句と、ほほ笑みの残像が焼きつくようで、繰り返し読みたくなる一首です。

―次回のお題「緑」（5月19日掲載）